NIE全国大会報告 ㊦

震災報道 授業で考える

記者の心に思いめぐらす

青森市で七月二十五、二十六両日に開かれたNIE（教育に新聞を）全国大会では、東日本大震災の記事から新聞の役割、防災、生き方などを考えるさまざまな授業が公開された。本県教員らによる新聞活用の実践発表もあった。

東日本大震災を伝える新聞から情報の意義などを学ぶ堤小の児童

「避難所に『取材おことわり』という表示が張られても、記者はあきらめず取材を続ける。なぜだろうね」。堤小（青森市）の五年生に対し、青山茂成教諭が問い掛けた。

児童は青山教諭が事前に新聞記者から聞いた話の資料を参考に、記者の心に思いをめぐらす。「怒りや悲しみを読者に感じてほしかったんだと思う」「被災者に必要な情報は何かを考えていたんじゃないかな」など、多様な考えが発表された。

続いて、津波で母親と祖母を亡くし、祖父が行方不明となった少女が写真が示された。がれきに囲まれた自宅跡で、祖母に買ってもらったトランペットを吹き涙を拭う少女。撮影したカメラマンが登場し、「被災者に申し訳ないと思うこともあるが、写真を撮らなければ悲しみや苦しみを伝えることはできない。命の大切さを分かってほしいと感じ、苦しみながら取材している」と心境を語った。

被災した新聞社が発行を続けた手書きの新聞、避難所の子どもたちが作った新聞も紹介された。

取材して集める情報の意義、情報発信者に求められる姿勢を考えるのが授業の狙い。青山教諭は「子どもたちは震災報道を通じ、いろんなことを感じることができた」と語った。